

短編 9

影



story by aono

第一章

爆音を轟かせて数台のバイクが通り過ぎていく。そのけたたましい音に呼応するかのよう
にカフェ『ブルー・モンク』の看板犬ロンが激しく吠えた。

「やめとけ」

カフェのオーナー羽山浩志は、ロンの首を軽くたたいた。諦めきれないように、ロンは低く唸
り続ける。

「あいつらに、何をしたって無駄さ」

午後十一時、閉店の時間だ。夜桜見物の人出も少なくなった。通称『桜川』と呼ばれるこの川
の両側には、数キロに渡って桜の木が植えられている。今年は例年より暖かく、現在五分咲きの
桜も、すぐ満開になるだろう。川に沿って両側に作られた遊歩道からは、若者達の嬌声が聞こ
える。

今まで流していたマイルス・デヴィスのCDをセロニアス・モンクに変えると、店内には訥々
としたピアノの音が流れる。開店以来、『ブルー・モンク』を閉店の合図として使っている。『
蛍の光』では、店のイメージに合わない。

羽山は、柔らかいオレンジ色でカウンターを照らしているスポットライトだけを残して店内の
電気を消すと、外においてある電飾を店の中に入れた。川にかかっている橋の上では、十数人の
若者が円陣を組んで酒を飲んでいるようだ。調子外れの歌も聞こえる。

この川沿いに、羽山がカフェ『ブルー・モンク』を開いて三年になる。当時ベアーデッドコリ
ーの子犬だったロンも立派な看板犬になった。成犬になると、体を覆う長い毛が顔の前にも垂れ
下がり、目が隠れてしまった。

「目はどこにあるんだ？」と常連客がロンの毛を持ち上げても、彼はピクリとも動かない。いつ
も店の隅で静かに寝そべっている。

「こいつ生きてるのか？ まるでぬいぐるみだ」と言われても、飼い主の羽山は笑っているだ
けだ。

ロンが再び低く唸り始め、次にまるで何かに怯えたように、遊歩道に面している広い窓に向か
って高い声で吠えた。ロンがそんな吠え方をするのを、今まで聞いたことがない。羽山は驚いて
壁一面にガラスをはめ込んだ窓に眼を向けた。店の前にある枝垂桜の木が、窓枠を額縁とした一
枚の大きな絵のように見える。暗い店内から目を凝らすと、大きく手を広げたマントのような
影が、ライトアップされた枝垂桜を揺らしながら通り過ぎていく。

「影……？」目で追いながら、すり寄ってきたロンを軽く抱きしめた。

「おいおい、震えているじゃないか、お前らしくもない」

影が消えると、ロンはまた店の隅に陣取った。影が騒音を連れて行ったかのように、外は静か
になった。

「マスター、いる？」と叫びながらドアを叩く音が静寂を破った。

「もう、閉店だよ」と羽山は渋い顔をしながらドアを開けた。ロンは起き上がって、ゆっくりと
訪問者へ近づいた

「おお、ロン。今日は起きてるじゃないか」と、しゃがんで軽く頭を撫でたのは、左隣の古本屋「パイナップル」の主人、田中昇だ。仕方なくといった様子で、ロンはペロリと昇の顔を舐めると、店の隅へ戻っていった。

「さっきの影、見た？」昇は少し興奮している様子で羽山の顔を見た。

「ああ、大きな影だったな。……死神がどこかに来たか……」

「えっ？」

絶句した昇の背中で、ギギーッと、ドアが開いた。ギクッと飛び上がって後ろを振り向いた昇の前に、右隣でブティック「セリジェ」を開いている柳素子の顔があった。

「あら、昇ちゃんも来てるのね」素子は、まだ三十歳にはなっていない田中を昇ちゃんと呼ぶ。

「その、昇ちゃんていうの、やめてよ」昇は気弱に抗議した。

「いいじゃない、私より一回りも若いんだから。それより、さっき大きな影が……」素子はそばに寄ってきたロンを撫でながら、羽山に問いかけるような眼を向けた。ロンはしきりに素子にじやれついている。

「俺も見た」シャッターを閉めながら、羽山は答えた。

「まるでマントを広げたみたいな影」素子は微かに体を震わせた。

「マスターったら、死神が来たなんて脅かすんだよ」子供のように口を尖らせて昇は素子に訴えた。

「人が死ぬと影が走るというじゃないか。体から遊離した魂だと。聞いたことないか？」羽山はカウンターの棚に飾ってあったパイプをとりあげると、布で擦り始めた。

「マスターは実際に見たことあるの？」素子は羽山の顔を覗き込むようにして尋ねた。

「ある。一度だけだが」

「いつのこと？」昇はテーブル席の椅子に跨り、背もたれに腕を乗せて興味津々という顔をしている。

「そうだな、もう四、五年も前になるかな。入院していた時だ」

「マスターが入院？ 似合わないなあ」

「俺だって病気になることはあるさ。それより、ちゃんと店に鍵かけてきたか？ 近頃は油断が出来ん」

「当然っしょ。小学生のガキだって平気で万引きする時代だからね。うちは古本屋だし、マンガも置いてないから、小学生の出入りは少ないけど。中坊はひどいもんだ。隙あらば万引きしようとする。あんなのが大人になったらどうなるのかね」

「近頃は子供が万引きしても、親はシラッとしてるみたいね」

「金払えば文句ないだろう、という態度だからね。親子とも反省の色なし。そうそう、さっき素子さんのお店に誰か来てたみたいだけど？ 男の客なんて珍しいね」と昇は素子を見る。

「取引先の人」素子はそっけなく答えた。昇の顔が一瞬曇ったように見えた。

「うまいスコッチがあるが、一杯やるか？」羽山はパイプを棚に戻すと、カウンターの中に入った。

「酒もあるんだ」昇はカウンターの椅子に移動すると羽山の手元を覗き込んだ。

「仕事が終わった後の楽しみさ。商売物じゃない」

「私も欲しい」素子は田中から少し離れて座り、「ストレートでね」と付け加えた。

「結構強い酒だぞ。42度ある。大丈夫か？」

「大丈夫よ、それに今日は酔いたい気分なの」

「ほどほどにしておけよ。俺は女の酔っ払いは嫌いだ」

「あら、男はいいの？」

「男のことは言ってない」

「性差別だわ」

「嫌なら帰れ。ここは俺の店だ」

「わかったわよ。一杯……うーん、二杯だけにしておく」

「昇はロックでいいか？」

「僕は水割り」

それを聞いて、素子は馬鹿にしたように鼻先で笑った。昇の顔が赤くなった。ロンはいつのまにか定位置に戻り、寝そべっている。

羽山は素子と昇の前にグラスを置くと、自分のためにロックを作った。

「それでさあ。マスターが見た入院中の影って、何だったのさ」水割りをちびちび飲みながら昇が聞いた。

「俺が入院していたのは、かなり前のことだ。六人部屋に入れられたが、その部屋には俺ともうひとり、七十歳くらいの老人だけだった。老人は俺より先客で、既に三ヶ月の入院生活を送っていたそうだ。俺は窓際だったが、老人は何故か知らんが入り口のそばのベッドに寝ていた」

「そのおじいさんは何の病気だったの」と聞きながら、昇は羽山がつまみにと出したナッツを口に放り込んだ。

「よくわからんが、肝臓の病気らしく顔色も悪かった。お互い見舞客もなく、話もせず、静かな部屋だったが……」羽山はいいよどんだ。

「……ある日、慌しく医者と看護婦が出入りしてたかとおもうと、老人をストレッチャーに乗せて部屋から出て行った。容態が急変したんだな。そしてその夜、俺しかいない病室の白い壁をマントのような影が通り過ぎていった」

「やだ、怖い」素子は低い叫び声をあげた。

「次の日の朝、看護婦がベッドを片付けに来て、俺はその老人が死んだことを知った。人が死ぬと影が走るという話を思い出し、あれは老人だったかもしれないと考えたわけだ」

「さっきみたいな影？」相変わらず水割りをちびちびやりながら、昇は顔を羽山に向けた。

「そうだな、同じような影だった」羽山は自分のグラスの中の氷をじっと見つめた。

三人の間に、沈黙が広がった。

ピーポーピーポーという音が遠くから近づいてくる。今まで身動きもせず寝ていたロンが薄目を開けた。

「救急車？ 何かあったのかしら」

「近所らしい」グラスを手にしたまま、羽山は窓から外を見た。点滅している赤いランプが見える。ほどなく、パトカーのサイレンも聞こえてきた。いつもは午前零時に消されるライトアップの灯りが、零時を回った今もまだついている。

「酔っ払い同士の喧嘩でもあったんじゃないか？ 毎年二、三回はこの手のトラブルがおこる。もう少しスマートに酒を飲めないものかね」

「遊歩道に吐いてる奴もいるし」羽山に答えるように昇が眉をしかめた。

「毎朝の掃除が憂鬱だ」

「店先にゴミが散乱してるし」素子も相槌をうつ。

「花見客は金とゴミを落としていくからね。僕みたいな古本屋でも少しは客足が増えるんだ。商店街にとってどっちがいいんだかわからないけど」

「そりゃあ、お金を落としてくれるんならゴミくらいは仕方ないんじゃない？ だから桜祭りをやってるんだし」

「セリジェも潤ってる？」

「桜をデザインした小物も置いているから、今の時期、多少は売り上げも伸びるのよ」

ずっと窓の外を眺めていた羽山は、そんな二人の会話を遮るように「何かあったようだ」と呟いた。

「二人とも、そろそろ帰ったほうがいい。パトカーが集まってきているぞ」

「ほんとだ。何台も停まってる。何があったんだろう、ちょっと見てこようかな」

「やじうまだな、昇は」

「昇ちゃん、そろそろ引き上げましょう」

「表はもうシャッターを閉めたから、裏口から出たらいい」羽山は二人にカウンター横の戸口を指差した。

二人が出て行くと、羽山はいつものように戸締りをした。ライトアップの光は消えたが、サーチライトの強い光が辺りを照らしている。こんなに警官がウロウロしていたら泥棒も入るまい。

グラスを持ったまま二階の寝室に入る。ベッドとナイトテーブルと本棚とで一杯になってしまうほどの小さな部屋だ。先回りしたロンはベッドサイドに置かれたカドラーで既に丸くなっている。

グラスを手でもてあそびながら、ベッドに腰掛けた。入院していた頃の記憶が鮮明に蘇ってくる。名前は思い出せないが、同室だった老人の苦しそうな顔。老人が逝くまでの二週間、殆ど会話もなかった。

羽山の病名はアルコール性肝炎。現実起こった悪夢や苦しさから逃れるため、アルコールに身を任せた結果だった。あの老人を見なかったら、今頃自分はこの世にはいない。

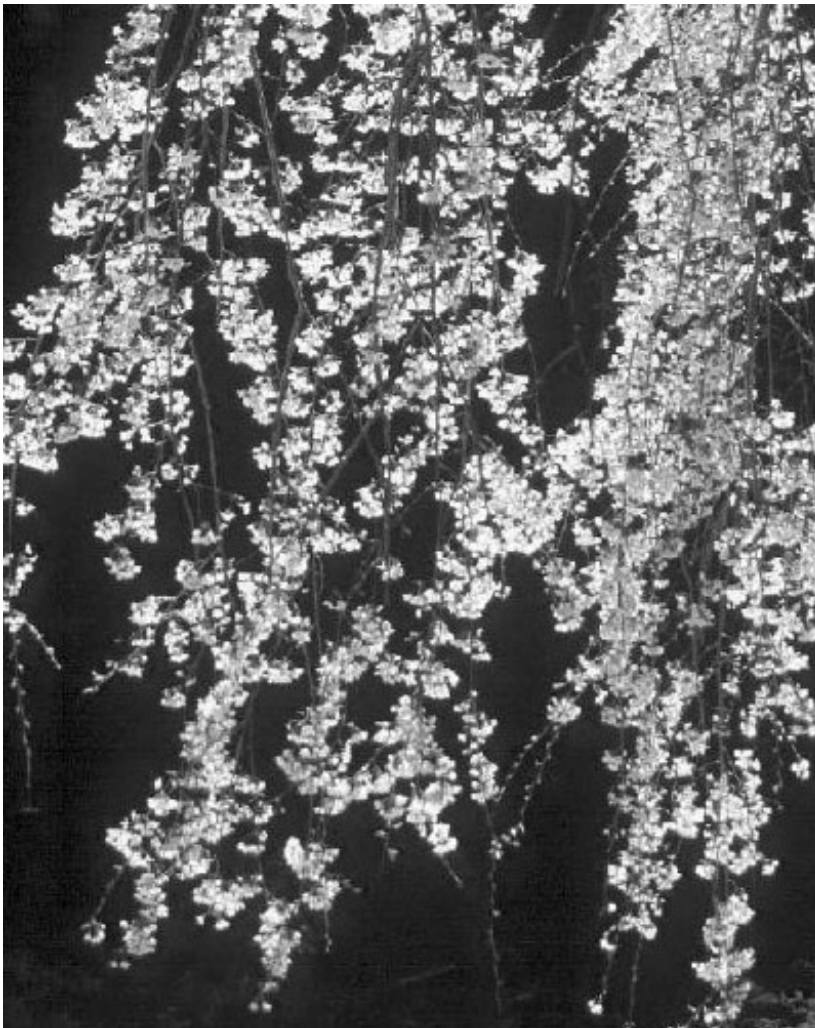
病室で影を見たとき、あんなものに俺の魂を盗られてたまるか、と強く思った。六ヶ月に及ぶ入院生活、その後叔母の家での一年間の静養。当然その間は禁酒。医者から全快を告げられた時は、この世に生き返ったと切実に思った。それ以来、酒に飲まれることはなくなった。

いつのまにか傍に来ていたロンに、手をペロリと舐められて、羽山は回想から現実に戻った。「ロン、心配してくれてるのか？ 俺は大丈夫だよ」

窓の外にはパトカーの赤いランプがまだ点滅している。

「何があったんだ？」

不審に思いながらも、ベッドに横になると睡魔が急激に襲ってきた。



第二章

ドンドン、ドンドンとどこかで音がする。頭が重い。誰かが店のドアを叩いているらしい。程なくキーンコンという聞きなれた音。裏口のチャイムだ。来客のようだ。頭を振って羽山は起き上がろうとした。後頭部が引っ張られる感じがする。時計の針は九時半を指している。やっとの思いでチャイムに応答した。

「どなたですか？」

「警察ののですが、開けてもらえませんか？」

「警察？」

「近くで事件があったので、聞き込みに回ってるんです」

「まだ寝てたんですよ、少し待ってください。すぐ開けるから」

カドラーの中にロンの姿はない。もう裏口のドアに張り付いているのだろう。羽山は手早く身支度をすると、階下へ下りていった。

「なにかあったんですか？」

二人組みの刑事らしき男はちらっと黒い手帳を見せた。年配の男は背が高く、肩幅も広くてがっちりしているが、若い男は細身で背もそれほど高くない。

「中に入ってもいいですかね？」

「疑うわけじゃありませんが、もっとしっかり手帳を見せてもらえませんかね」

二人は渋々と手帳を開いて見せた。羽山はじっくりと手帳を眺めると、刑事達を中へ招じ入れた。

ロンはそばに寄って、匂いをフンフンと嗅ぐと、店の隅へと退散していった。

「昨日近くで事件がありましてね」二人は勧められた椅子に座ると、年配の刑事がしゃがれた声で話し始めた。もうひとりがメモをとる。

「事件、ですか……」

「川の中で男性が死亡していた事件です」

「川ってその桜川のことですか？ 溺れるような川じゃないでしょう。水深五十センチもないと思いますよ」

「事故の線も捨てているわけじゃありませんが、状況から見ると、橋から投げ込まれたと思われまます。そこで、昨日何か気がつかれたことがないかと、皆さんにお聞きしているわけでした」

「何時頃のことでしょうかね」

「昼間は人通りも多かったようですが、トラブルとかありませんでしたか？ いつもと変わったこととか」

「何も気がつきませんよ。昨日は桜祭りということもあって、一日中忙しかったですから」

「こちらの営業時間は何時からですか？」

「うちは午後二時開店で、アルバイトの学生が交代で二時から九時まで働いていますよ。前田君と五十嵐君、東都大学の学生です。午後十時半頃には客も引けたので、十一時には店を閉めました」

「九時以降はひとりで？」

「九時を過ぎると客はポツポツでしたから、ひとりで充分やれますのでね」

「その後は誰かに会いましたか？」

「十一時過ぎに隣のブティックの柳さんと古本屋の田中君が来ました」

刑事は頷いた。既に事情を聞いているのかもしれない。

「九時から十一時の間に馴染みの客はいませんでしたか？」

「いや、花見客ばかりです。昨日はみんな自分の商売で忙しいから、商店街の人は来るはずないですよ」

刑事はそれから二、三質問をすると、又何うかもしれません、何か思い出したら知らせてくださいといって帰って行った。ロンはその後姿に向かってワンと吠えた。

若い刑事の声を聞かなかつたと、羽山は気がついた。入ってきたときも、帰るときも、軽く会釈をただけだった。今の若者はあんなものなのだろう。

「川で死亡か。酔っ払って落ちたんだろう。人騒がせなことだ」と羽山はひとりごちた。

「昨日の影……。まさかね」浮かんだ考えを追い出すように、頭を左右に振った。

両腕を大きく開いて伸びをすると、羽山は店のカウンターに入った。細口のポットでお湯を沸かし、冷蔵庫に入れておいた自分用のネルフィルターを取り出し熱湯をかける。苦味を強くしたシティーに焙煎して中挽きにした粉をフィルターに入れ、ゆっくりとお湯を落とす。

やがてふっくらとした香りが店内に漂ってくる。羽山はコーヒーカップを手に、テーブル席へと移動した。朝食は取らない習慣だし、昼食も開店前にカウンターで簡単に料理して済ませる。店のドアの隙間から差し込まれた新聞を拾うと、社会面を開いた。刑事の訪問が頭の隅に引っかかっている。中段の左端に記事があった。大きな扱いはない。

『桜の名所で変死体』

八日午前零時頃、東京都〇〇区XX町で、通りかかった男性会社員（39）から「川の中に人が倒れている」と110番通報があった。〇〇警察署の署員が、男性がうつ伏せに倒れているのを確認した。年齢は五十歳前後と見られる。身元はわかっていない。九日、司法解剖して詳しい死因を調べる。

現場は桜の名所としても知られ、昨夜も夜桜見物の人々で賑わっており、警察では事故と事件の両面から捜査を始めた。

読み終わって、羽山はふーっと息を吐いた。新聞を畳むとテーブルの上に置く。警察は事故の線はないと決めているようだ。

また裏口のチャイムが鳴り、ロンがすばやくドアへ突進した。

「マスター、いるんでしょう？」

田中昇だ。羽山は無言でドアを開け、昇を店へと招じ入れた。ロンはフンフンと昇の匂いを嗅ぐと、店の隅へと移動していった。

「お前のところにも来たか」

「刑事でしょ。来ました、来ましたよ。マスターのところにも？」

「ああ、少し前だ」

「じゃ、僕の方が先だね。九時頃だったかな」

「何を聞かれた？」

「大したことは聞かれなかった。というか、実際知らないし」

「刑事の話のニュアンスでは事故じゃないらしいね」羽山はコーヒーカップをゆっくりと回しながら、昇の顔を見た。

「マスター、いい香りが店中に漂ってるよ」昇はクンクンと鼻腔を動かした。

「ここはカフェだからな」

「意地悪言っていないで僕にもコーヒー入れてよ」軽口を言いながらも、昇の目には心配そうな色が漂っている。

羽山はコーヒーを入れながら、カウンターに肘を着いてぼんやりとしている昇の顔をちらっと見た。

「なにかあったのか？」

「うん……」

「そうか。コーヒー飲んで気分転換したらどうだ」

「うん……」昇はコーヒーカップを両手で包むように持つと口に運んだ。

「うまい！」一口飲んで、昇は声をあげた。

「お店を出してるのと違うでしょ。ずるいなあ」

「人間き悪いこと言うんじゃない。ちゃんとメニューに載ってる。そこに書いてあるだろ」

昇はメニューを眺めた。

—コーヒー（ネルドリップ）八百円—

「高いよ」

「手間隙かかるし、豆だって違うんだから仕方ない。レギュラーは五百円にしてある」

「マスター……」

「何だ？」

「実は……」昇は言いよどんでいる。

羽山は空になったコーヒーカップを手に、黙って待っていた。

「実はね、昨日の晩のことなんだけど、ここへ来る前にセリジェを覗いたんだよ」

「何か用があったのか」

「えーとさ、実は……」

「……実は？」

「彼女のさ」

「彼女？ 素子さんか？」

「やだなあ、僕の彼女」

「彼女ができたのか」

「まだ付き合って三ヶ月なんだけど、今月末が誕生日でさ、プレゼントに何がいいのか分からなくて、素子さんに相談しようと思ったのよ。で、九時頃お店に行ったら、先客がいて」

「男の客か」羽山は呟いた。

「マスター、よく知ってるね」

「昨日自分で言ってたじゃないか」

「そうだった？ で、その客と素子さんが言い争いをしてたわけよ」そう言うと昇はコーヒーをひと口飲んだ。

「なんか、ばつが悪くて、顔を見せずに帰って来ちゃったんだけど。今朝の事件聞いて心配になって」

「何が心配なんだ？」

「だからさあ。昨日の男は何の関係もなかったのかなあと」

「ばかばかしい」羽山が言うのと同時に、ロンがフーッと唸った。

「そうだよね、ばかばかしいよね」ひとりで頷くと、にこっと笑ってコーヒーを飲み干し、「ごちそう様」と言って帰って行った。ロンは見送ろうともしなかった。

羽山は飾ってあるパイプを手にとると、無意識に磨きながら、しばらく考えていた。昇が単に言い争いを聞いただけで、あのよう心配するわけがない。

素子が『ブルー・モンク』の隣に店を出したのは二年前だった。それまではシューズショップだったのだが、一月に開店して一年も経たない十二月に、閉店のお知らせのビラが貼られた。斬新な店内に、洒落た靴を一足ずつ飾るように展示していたその店は、客にとってもとっつきの悪い感じがしたのだろう。店内に客のいるのを羽山は見たことがなかった。

その店と入れ替わるようにブティックを出店したのが素子だった。次のテナントがすぐ入って良かったですねと大家と出会った折に羽山が言うと、「私も不思議なんですよ。あの店舗が空くまで待ってたらしいんですが。そんなにいい場所ですかねえ」

大家の池上荘介は、ちらちらと上目遣いで羽山の顔を見ながら、首をひねった。

店内の改装も以前の内装を生かしながら、手際よく行われたらしく、素子が開店の挨拶に来たのは一月も末の寒い日だった。初対面から、かなり気さくな女性だったと覚えている。

客のいない時間を見計らったかのように店に現れた素子は、菓子折りを差し出し、「オーナーの羽山さんですか。私、隣にブティック『セリジェ』を開店した柳素子です。よろしくお願ひします」と少し鼻にかかった声で言うと、軽く頭をさげた。

「どうも。こちらこそよろしく」羽山はぶっきらぼうに答えた。

当然、すぐ帰ると思っていた素子は、そのままカウンター席に座り、「レギュラーお願ひできますか」と羽山の顔をじっと見ながら注文した。

その時ロンは素子のそばへ来て、尻尾を振りながら愛想をふりまき、足元に座った。かなり珍しいことだった。

「お前も男だね」と内心苦笑しながら思ったものだ。「美人にはどうも弱いらしい」

それから二年、毎日コーヒーを飲みに店に現れる素子と、冗談を言い合う間柄になっても、その素性を羽山は知らない。お互い様だ、と羽山は思う。たぶん素子も過去を切り離してここへ来たのだ。

その日、素子は『ブルー・モンク』に姿を見せなかった。『セリジェ』もシャッターを降ろしたままだ。

被害者が欄干から落とされたとされる橋は、青いビニールシートで覆われ、何台ものパトカーが取り囲むようにして停まっている。店の前の遊歩道は警官とマスコミでごったがえし、通行できない状態だ。

今日は開店休業だと覚悟していると、やじうまと思しき客がポツポツと『ブルー・モンク』に入ってくる。にわか記者になった客は、羽山を捕まえては、面白い話はないかと聞きだそうとする。いつもとは違う雰囲気閉口して二階に避難したのか、ロンの姿はいつのまにか店から消えていた。

午後九時ごろ、客がきれたのを潮に、羽山は閉店の準備をはじめた。アルバイトの五十嵐を帰すと、電気を消し、早々にシャッターを降ろした。ロンがいつのまにかそばに来て、羽山をカウンターへと誘導する。

「ごめんごめん。忘れてたよ」

羽山はカウンター内の隅に置いてあるロンの食器にドッグフードを入れた。騒々しい客ばかりで、今日は疲れた。ロンがガツガツと食べるのをぼんやりと眺めながら、昇の話を思い出していた。

素子の客は誰だったのだろう。

第三章

次の日、やじうまとマスコミから逃れるため、羽山は店を臨時休業することに決めた。アルバイトの前田と五十嵐に連絡を入れる。バイト代は出すからと伝えた。彼らも収入の予定があるだろう。

シャッターを開け、「本日休業」の札を早々とドアのノブにかけた。書き入れ時だが仕方がない。新聞を拾って、カウンターの上に置く。

ロンにリードをつけて朝の散歩に出た。相変わらずの警官の数だ。橋とは反対方向の川下に向かって、遊歩道を歩き始めた。少し風が強い。両側の桜は川の中央に向かって枝を伸ばし、川面には桜の花びらが流れに乗って踊っている。

「マスター、おはよう」背後で昇の声がした。

「やあ、ロン。散歩か」頭を撫でられて、ロンは尻尾を左右に少々動かした。

「相変わらず気のない尻尾の振り方だねえ」昇は少々不満そうだ。

「昇にしては早起きじゃないか」羽山は立ち止まって、昇のぼさぼさの頭を見つめた。

「ひでえ頭だな」

「あ、そんなひどい？ 今日シャワーまだ浴びてないからなあ」

「用はなんだ？ お前、昨日からおかしいぞ」

「うん……歩きながら話すよ。ロンの散歩の邪魔しちゃ悪いから」

羽山と肩を並べて歩きながら、昇は話し始めた。

「大家さんに聞いたんだけど、殺された人は素子さんの保証人なんだって」

「保証人？ 入居する時のか？ かなり親しい間柄ってわけだな」

「そう。で、素子さんは警察に呼ばれたらしい。事情聴取ってやつかな。僕も昨日マスターのところから帰ったら警察が来ていて、あの日の夜の話を聞かれたんだ。写真も見せられた」

「素子さんと言いつ争っていたという客だね」

「暗かったし、はっきり顔見たわけじゃないから、写真見ても分からなかったし」

「お前、本当は二人の会話を聞いたんじゃないか？」

「立ち聞きしたわけじゃないよ、大きい声だったから聞こえたんだ。警察には言ってない。だって殺された人かどうかはまだ決まってないからね」

「どんな会話だったんだ？」

「素子さんが大きな声で男を責めていたような感じがした。お店を取っただけじゃ足りないの？ これ以上何をしろっていうの、とか」

「男は何と返事をしていた？」

「店は借金のかたに貰っただけだ。当然の権利だ。ここに又店を出させてやったんだから、そのくらいはしても当然だ、嫌なら耳をそろえて返せ、みたいなこと言ってた。それ以上は聞いてない。慌てて帰ったから」

「その男にまだ借金があるって事か」

「そんな事わかんないよ」

「素子さんは、今家に帰っているのかい？」

「昨日の夜、青い顔して帰って来たけど、かなり疲れているみたいだよ。長時間色々聞かれたらしいし」

素子が犯人とは思えない。だいたい男を欄干から落とすなんて体力的にも無理だろう。誰が見ているか分からない時間帯に、そんな無謀なことをしようとするわけがない。

二人はしばらく黙って遊歩道を歩いた。ロンもおとなしくついている。

『パイナップル』の前まで戻ってくると、羽山は聞いた。

「昇は素子さんを疑っているのか？」

「まさかあ。疑うわけないじゃん。ただ、これ以上事件に巻き込まれなければいいなと思ってるだけ。マスターはどうなのよ」

「素子さんにそんなことが出来るとも思えないし、するような人でもない、この二年間の付き合いで分かっているつもりだ」

『ブルー・モンク』に戻ると、カウンターの上に置いた新聞を手にとった。

被害者の名前が判明していた。松江真治（45）。羽山はその名前と顔写真を凝視した。

松江真治。

年齢を確認する。

四十五才。

川に投げ込まれた際、うつ伏せになったのだろうが、かなり泥酔していた為、起き上がることが出来なかったらしい。死因は溺死だった。

間違いない。あの松江だ。羽山の心臓の鼓動が速くなる。警察は事件と断定していた。

何故松江がこんなところで殺される羽目になったのか？

素子とは、どのような関係にあるのか？

羽山は心を落ち着かせるために、濃いコーヒーを入れた。ロンが足元に擦り寄って、心配そうに見上げている。

「ロン、昔の亡霊が出てきたようだ」

ロンの頭をなでながら、コーヒーを口に含む。

「ほんとは強い酒でも飲みたいところだ……」

羽山はカウンターのパイプを取り上げて、両手で包むように持ち、じっと眺めた。

殺してやりたいくらい憎んでいた松江真治が死んだ。喜ぶ気持ちはなかった。心の中の傷がまた抉られた気分だ。パイプをぐっと握り締め、頭に浮かんだ湯山悦子の顔を追い払おうと首を強く振った。

初めて自分の店『ペーパームーン』を持ったのは三十才を少し過ぎた時だった。勤めていたカフェ&バーでノウハウを覚え、独立した。仕事は順調で、先行きの心配は何もなかった。持ち前の客あしらいのうまさで店は繁盛し、支店を出すまでになった。そんな時、行きつけのバーで出会ったのが悦子だった。

ドレスもバッグも靴も高価な品のようにだったが、それがよく似合っていた。二十代交換かな。横目で羽山は値踏みした。

「お酒強いんですね。ここにはよくいらっしゃるの？」と声をかけてきたのが始まりだった。

「酒ぐらいしか楽しみはないですから」羽山は愛想よく答えた。

女性の一人客で、自分から男に話しかけてくる女性を、今なら警戒する。だが、当時は三十三才の若さだった。店では社長と呼ばれ、従業員達からは尊敬されている。自分には魅力があると錯覚していた。

「貴女もおひとりですか？ よろしかったら、ご一緒にいかがですか？」

それがきっかけで悦子と親しくなり、半年後には結婚を約束するまでになった。

支店も四を数え、事業は発展の一途をたどり、悦子に経理の一部を任せられるようになった。いずれ結婚するのだから、早めに仕事を覚えてもらう方がいい、羽山はそう考えていた。

高級住宅街の低層のマンションのワンフロアを借り、夢だったウォーターベッドも買った。一緒に住むようになってから、通帳もカードもすべて悦子に管理させていた。

その年のクリスマス、例年なら明け方まで仕事をするのだが、店はフロアマネージャーの小野に任せ、社長つきの運転手と呼び、家へ向かった。悦子を喜ばせたいと、特注で作らせたダイヤのブレスレットがコートのポケットに入っている。まだ八時だ。無理のきくレストランで食事をするのも悪くない。明け方まで帰れないかもしれないと言ってあるから、食事の支度はしていないだろう。

マンションの前で車を降り、自宅の窓を見上げる。悦子の喜ぶ顔を心に描きながら、ドアに鍵を差し込みゆっくりと回す。部屋の暖かい空気が、羽山の体をほぐし始めた。

悦子を驚かそうと、そっと居間へ入る。だが、居間にもダイニングにも悦子の姿はなかった。いぶかしく思いながら、寝室のドアを開ける。新居のシンボルとして買ったウォーターベッドの上に、羽山の知らない男と一緒に悦子はいた。男の顔を睨みつけ、ドアをバタンと閉めて家を飛び出した。体が震えた。状況が飲み込めなかった。混乱した頭のまま、隠れ家として使っているバーへとタクシーを走らせた。そこは個人的に上得意の客だけを招待する羽山の五番目の店ではあるが、公にはしていない場所だった。

黒光りのする大理石のカウンターにトンボ模様のランプシェード。スタンドグラスで出来ているティファニー製だ。グラスは全てバカラから購入、羽山が拘りを持って作った店だった。

カウンターに腰を降ろし、グラスに氷とウォッカを入れる。客にはカクテルを出すのだが、今はそんな気分ではなかった。だが飲めば飲むほど頭が冴えてくる。さっき見た光景が頭のスクリーンに何回も繰り返される。

「あいつは誰だ？」

羽山は相手の男と自分を罵った。

「あいつを殺してやる！ 俺の家だ。二人とも放り出してやる！ いや、悦子は優しい女だ。理由があるはずだ。きっと騙されてるんだ。あの男が悪いんだ。くそー。バカヤロー。殺してやるぞー」拳でカウンターを激しく叩く。やがてアルコールが回り、コートを着たまま、羽山は眠ってしまった。

寒さで目が覚めた。エアコンをつけ体を暖める。濃いコーヒーで頭も体も少しすっきりした。昨夜のことは何かの間違いだと自分へ言い聞かせながら自宅へと向かった。早朝から呼びつけられた運転手は、それでも心配そうにルームミラー越しにチラチラと羽山を見ている。

心を落ち着かせようと、自宅より五百メートル手前で車を降りた。マンションまでゆっくりと歩く。家の窓を見上げたが室内は暗いようだ。まだ寝ているのか。そのほうが都合がいい。羽山はガシャガシャと音を立てて鍵を回すと家へ入った。中は静まり返っている。大声で「悦子」と呼んでみた。が、返事は聞こえない。寝室の扉を開けたが、寝乱れたベッドの中にも悦子はいなかった。広いリビング、ダイニング、ベッドルーム、そして予備の部屋がひとつ。くまなくさがしても、聞こえるのは自分の足音だけだった。

思いついてクローゼットを開けた。悦子のドレスと、隅のほうに置いてあった大型のキャリーバッグが二個とも消えていた。

コートを脱ぎ捨て居間のソファに寝転んで、羽山はぼんやりと天井を見つめた。エアコンから吹き出す暖かい空気が頬をかすめた。

どのくらいそうしていただろうか、電話の呼び出し音が羽山の頭のスイッチを入れた。飛び上がるように起きると受話器を荒々しく掴んだ。

「悦子？」

「いえ、小野です」フロアマネージャーからだった。

「なんだ、君か」

「社長、困ったことが起こりました」

「どうした」

「店の口座に残金がないと銀行から連絡がありました。支払日は明日なんです」

「残金がない？ どの口座だ」

「奥様の管理されていた口座です。私がお預かりしている通帳の口座には少々ありますが、大口は殆ど奥様が管理されていたので、私は気がつかなかったのです」

小野は悦子が経理担当になったときから奥様と呼んでいる。

「すぐ店へ行く」

受話器を置くと、家の金庫を開けた。中に入っているはずの通帳、諸々の印鑑、現金が消えている。寝室へ戻ると、悦子がいつも宝石類を入れていた引き出しを調べる。あきらかに安物と思われる装飾品以外は全てなくなっていた。

打ちのめされてはいたが、羽山は店へ急いだ。マネージャーの管理していた通帳から、とりあえず従業員の給料は払える。ほっとしたのもつかの間、その日から二ヶ月間、金策と店の後始末に追われた。借入金の返済が終わっている本店の権利書も銀行の金庫から消えていた。

何がなくなったのかすぐには分からない。悦子に全てを任せていた自分を、羽山は呪った。

カード会社数社からの請求も、想像を超える金額だった。それも何とかしなくてはならない。金策の合間に、相手の男の手がかりはないかと、悦子と初めて会ったバーへ出向いた。

「そういえば、羽山様のことをしつこく尋ねていたお客様がいらっしゃいました」

「俺のことを？」

「ええ、いつもカウンターの隅に座られる、目立たない方でした」

「何で俺のことなど聞くんだ？」

「それは、お若いのにロイヤルハウスホールドをボトルでキープされていらっしゃるからでしょう。それにコニャックよりアルマニアクを好んでいらっしゃる。若いのに凄いねと仰ってました。興味をもたれたのではないですか？ 羽山様のことは、何かのお店を経営されているらしいとだけその方にお教えしましたが」

「そいつは、まだここへ来る？」

「いえ、近頃は見えません。もう一年以上いらしてないと思います。殆ど毎日のご来店頂いた時もありましたが」

一年前……悦子と出会った時期だ。

「名前はわからないかな」

「さあ。寡黙な方で、お支払いも現金でしたので」

「いい気になって喋っていた俺の話を、いいカモがいると黙って聞いていたわけだ」羽山は自嘲気味に呟いた。

悦子に買い与えたアルファロメオの名義が、松江に変更されていると突き止め、やっと悦子の相手が松江真治だと判明した。銀行に残された振込み先は架空名義で複数あり、既に全額引き出されていた。

悦子を恨む気持ちは不思議とおきなかった。当時はまだ惚れていたのかもしれないと羽山は思う。

膨大な借金を抱えて店を建て直す気力はなかった。店を処分し、売れるものは全て売り、それでも残った借金を返していかななくてはならない。三十五歳で羽山の人生は急旋回した。

八年間で借金は返し終えたが、身も心もくたびれきっていた。これからは働いた全ての金を使える、そう思ったら歯止めが効かなくなった。緊張が途切れ、毎晩酒を飲む生活が続いた。外で飲む酒ではない。格安のショップで買う焼酎が主だ。シングルモルトのスコッチにはもう手が出ない。

壊れる寸前の体への大量のアルコールの注入は、アルコール性肝炎を引き起こし、入院を余儀なくさせられた。羽山は病院の白い壁に映った影をまた思い出した。

ウォーターベッドの上に横たわっていたあの男の顔を決して忘れない、いつか復讐してやる。そう誓ったその顔が目の前の新聞に被害者として載っている。家族から捜索願が出ているとは書かれていない。

「悦子は松江の妻になったのではないのか？」疑問が羽山の口をついて出た。

「素子はどこで松江と知り合ったのだろう」



第四章

刑事が再び『ブルー・モンク』に現れたのは、事件から五日目の午後、開店前の時間だった。川沿いの桜並木もそろそろ満開を迎えようとしている。店の前の枝垂桜の枝には、花の間から既に黄緑色の若芽が顔をのぞかせていた。

「被害者を知ってたんですね」いきなり、年配の刑事が切り出した。

「新聞で見て驚きましたよ。あいつだったとはね」

「彼には以前かなりひどい目に合わされたそうですが」

「もう、十年以上も前の話です。調査済みでしょうから、隠す気はありませんよ」

「彼を見かけて、殺してやろうと思ったんじゃないですか？」

「見かけてませんから、何とも思いませんね」

「隣の店に来たんですから、見かけた確率は高いと思いますが」

羽山は肩をすくめてみせた。

「前にも言ったように、桜祭りで忙しかったですからね。どの店だって隣など見ていませんよ。アリバイなんかありませんけどね。先日も言ったように馴染み客はその日の夜には誰も来てませんから。殺人罪で逮捕されたら、弁護士にその日の客を探してもらいましょうかね」うんざりした口調で羽山は答えた。

ロンは刑事に向かって低く唸っている。

「隣の柳さんの嫌疑は晴れたんですね」羽山は素子が気がかりだった。

「女性一人では無理だと我々は一応見えています。まあ共謀者がいたとすれば不可能ではありませんが」

刑事は質問を突然変えた。

「湯山悦子さんをご存知ですね」

「知ってます」

「以前、あなたと親しかったと聞きましたが」

「ええ」

「湯山さんに会ってきました」

「そうですか」

「松江さんは湯山さんをずっと探していたようです」

「探す？」

「被害者の身辺を調べているうちに湯山さんの名前が挙がってきたのですが、湯山さんには当日のアリバイがあります。あなたと松江さんとの関係も彼女から聞きました」

「そんなこと、私に漏らして構わないんですか？」羽山は皮肉っぽく聞いた。

刑事はその質問を無視した。

「二人は羽山さんの店から金と権利書を奪ったわけですが、松江さんには金しか渡さなかったそうです」

「したたかですなあ」思わず嘆息が漏れた。

刑事は苦笑しながら続ける。

「湯山さんの話によると、彼には危険な匂いがしたと言うんですな、女の感というやつですか。権利書は見つからなかった事にしていたらしい。何年間か一緒に生活していたようですが、ある時、権利書と彼の取引先のリストまで持って逃げた。その後数年間、名前を変えて隠れるように生きてきた。本人は松江さんの影にいつも怯えていたと言っています。ま、そんな事情らしいです。だから彼は湯山さんの行方を必死で探していた。」

「取引先？ 何の取引先です？」

刑事は、羽山の質問に答えようとしなない。

「湯山さんは、あなたの所へいづれ戻ると松江さんは考えていたようです」

「ばかばかしい」

「そうですか？ 私には順当な考えだと思いますが。あなたは湯山さんを許し、今話した事情を全て承知の上で実際に連絡を取り合ってたんじゃないですか？」

刑事は探るような目で羽山を見た。

「話にならない」

「だから、被害者が近づいてきたとき、咄嗟に川に投げ込んだ」

「やれやれ。弁護士でも呼びましょうかね」

刑事は手帳を閉じて、立ち上がった。

「またそのうち伺いますよ」

刑事が帰った後、思わず愚痴がでた。

「死んだ後まで奴は俺を不愉快にさせる」ロンがクーンと鼻を鳴らした。羽山はパイプを取り上げると、磨き始めた。これを触っていると不思議と心が穏やかになる。煙草をやめてから三年が経った。

昇と素子が二人揃って『ブルー・モンク』に姿を見せたのは、閉店間際の十時半頃だった。客は既に引けて、店内にはビリー・ホリデイのかすれた歌声が流れている。

ロンは昇の前を素通りして、素子に飛びついた。尻尾を千切れんばかりに振っている。

「この態度の差はなんなのさ」昇は口を尖らしている。

「ロンはオス犬だ。仕方ないさ」羽山は笑いながら二人にコーヒーを入れた。

「マスター、申し訳ないことをしました」素子口を切った。

「ご迷惑をかけて、ごめんなさい。ほんとにごめんなさい」

「気にしてないよ」

「刑事が来たでしよう？」

「ああ、二回ほど」

「私、警察に色々聞かれて……マスターにも不愉快な思いをさせて……」

「大変だったね」羽山は同情をこめて素子を見た。

「私と松江との関係、聞きました？」

「詳しくは知らない。以前からの知り合いだそうだね」

「知り合いですって？」吐き出すような言い方だった。

「あいつは蛭みたいな奴よ。食いついたら絶対離さないんだから」

「素子さんの保証人だったんじゃないの？」昇が驚いたように口を挟んだ。

「あんたは黙ってなさい！」素子に強く言われて、昇は首をすくめた。ロンが足元で鼻を鳴らした。

「私が軽率だったの。松江は兄の高校の時の同級生だった。私がブティックを出したいと兄に相談したら、スポンサーになってくれる人だと、松江を紹介してくれたんです。その時私はとてもラッキーだと思ったわ。ところがあいつはとんでもない奴だった」

カップを持つ素子の手が震え、中のコーヒーが波打っている。

「兄は松江からクスリを買っていた。だから彼の言うなりだったんです。松江は最初は親切だった。でも知らない間に、店もお金も全部彼のものになっていて、しかも私が彼に借金をしたことに……無知って怖い。言われるままに押した印のせいでこんなことになるなんて」

ロンが素子に擦り寄って、手をペロリと舐めた。片手でロンの頭を撫でながら、素子は話を続けた。

「気がついたら借金でがんじがらめになっていて、どうにもならなかった。その時、松江が言ったんです。新しい店を出させてやるけど条件があるって。ある男の行動を毎日報告すること。写真も渡されたわ、男と女の。で、女が現れたら、すぐ知らせろとも言われた。うまくいったら借金を棒引きにしてやるとも。女は、松江から重要な書類を盗んだ悪い奴だって。でも、私はこれ以上、マスターを騙すのが嫌だった。それであの夜言い争いになったの」

「俺と悦子の写真か……俺の写真まで持っているとは、驚いたね」羽山は憮然とした。自分の写真をいつ撮ったのだろう。まったくもって間抜けな話だ。

「取引先のリスト、刑事はそう言ってたな。たぶんヤクの取引先だ。松江が悦子を追いかけるわけだ」

「でもさ、何も持たないで逃げたら、追いかけられることもなかったと思うよ」昇が口をはさんだ。

「何かのときの担保のつもりだったんじゃない？」素子が応じた。

「危険だなあ」昇は呆れたような声を出した。羽山は時計を見た。

「おっと、閉店の時間を過ぎてる。ちょっと待っててくれ、閉めてくるから」

シャッターを閉め、CDをビリーからモンクへ変えた。羽山は昔のジャズが好きだ。何故かほっとする。

「酒の時間にしよう」とスコッチの瓶を取り出す。アルコールでも飲まなければやってられない。

「僕も今日はロックにしようかな」

「無理しない方がいいわよ」素子が優しく言った。

「素子さんのそんな声、初めて聞いた」わざとおどけた顔で、昇は素子を見た。

「悪かったわね、私はもともと優しい女なの！」

羽山はロックを二杯と水割りを作った。

「俺の嫌疑はまだ晴れてない。殺人犯かもしれないぞ」真面目な顔で言うと、グラスを各々の前に置いた。二人はポカンとした顔で羽山を見る。

「そっかー。その線があったかー」昇はニヤッと笑うと水割りを口に含んだ。

「マスター、この水割り、もう少し濃くしてくれない？」

「いいよ。でも大丈夫か？」

「僕も少し酒の修行をしないと」

「あら、どうして？」

「彼女がけっこういける口でさあ。僕も少し頑張ろうかと……」

羽山と素子は顔を見合わせて微笑した。昇にようやく春が来た。

「昇……」羽山はこの際、気にかかっていること聞いておこうと考えた。

「なに？」

「お前、素子さんの保証人のこと知ってたな。誰に聞いたんだ？」

昇はキョトンとした顔で羽山を見た。

「あれ？ 知らなかった？ ここの家主の池上って、僕の叔父なんだ。母方だけど」

「えっ？ そうなのか？」

「うん、子供がいなくてさ、僕を結構可愛がってくれてる。家作関係の書類なんかは僕が作成してるし」

「どおりで、優雅な商売をしてると思ったよ」

「私もそう思った。古本屋って儲かるのねと、結構羨ましかったりして」

「漫画を扱わないと、古本屋は厳しいよ。家賃払うのが精一杯」

「家賃払ってるのか？」

「家賃払ってるの？」二人が同時に声を出した。

「あたり前でしょう。まだ僕の持ち物じゃないんだから」昇は憤慨した面持ちで二人を見たものの、「少しは安くしてくれてるけど」と小さな声で付け加えた。

その時、ロンが窓のそばへ駆け寄った。ライトアップされた枝垂桜の枝を大きな影が通りすぎていく。ロンが遠吠えとも思える声で吠える。全員身動きも出来ず、その影が通りすぎていくのを見ていた。

「怖い」素子は泣きそうだ。

「まただれか死んだ？ まさか……」素子の顔が青くなる。

昇は無言で枝垂桜を眺めている。

羽山が低い声で呟く。

「川に又誰か落ちたんじゃないだろうね。まだ事件は解決してないわけだし、誰かが松江を橋から突き落とした事は確かだ。又そんな事件がおきないとも限らない」

「私……店へ戻るわ」

「どうかした？」昇が心配そうに素子を見る。

「兄が……」

「お兄さんが？」

「クスリを吸い過ぎて意識不明でずっと入院しているの。もしやと思って」

足早に帰る素子を見送った二人は、枝垂桜の木にまた目を移した。桜の花は満開を過ぎようとしている。風に揺れた枝から、花びらがはらはらと地面へ落ちていった。



第五章

事件から一週間ほどが経った。まだ犯人が捕まったという報道はない。あれから羽山の元へ刑事が来ることもない。

営業は平常に戻ったものの、羽山はなんとなく落ち着かない。捜査の行方が気になるが知る術はない。

素子の兄はまだ意識がないらしいが、特に状態が悪化してはいないそうだ。影は彼ではなかったということだ。

二時に出勤してきたアルバイトの前田に、ガラス窓を入念に磨かせた。

桜祭りが終わると、新緑の季節だ。羽山は花より新緑を美しいと思う。新緑を眺めながら飲むコーヒーもまた格別だ。初夏に向けて新メニューも考えなければ。

その日の夕刻、昇がボタンとドアを荒々しく開けて『ブルー・モンク』へ駆け込んできた。居合わせた客が驚いて入り口に視線を向ける。

「お客様、ドアを乱暴に開けないでください」昇はそんな羽山の嫌味な言葉も耳に入らないようだ。

「マスター、ビッグニュース」昇は興奮を隠し切れない。

「どうかしたのか？」

「夕刊に出てるよ。犯人が捕まったみたい」

「例の？」

「そう。どうやら暴走族の一味の仕業みたいだ」

昇が持ってきた新聞をカウンターの上で開く。

「暴走族……あいつらか。事件のあった日、騒いでいた奴らがいたな」

新聞には、暴走族の一団が面白半分に松江を橋の欄干から落としたと書かれている。

「殺すなんてつもりはなかったんだ。酔っ払ってガンつけてきたから、皆で目を覚まさせてやろうぜって……」と犯人の一人が供述している。

素子の店を出た後、近くの居酒屋でかなり飲んだらしい。その帰りに暴走族に捕まったのだろう。松江の性格なら、彼のほうから喧嘩を売っても不思議はない。

「これで一件落着だな」羽山はほっとした。いつまでもこの事件を引きずってたくない。

「素子さんもひと安心だね。僕、ちょっと『セリジェ』へ行って来る。プレゼントも買わなくちゃいけないしね」

「そうだ、今晚三人で飲まないかと、誘ってみてくれ。何か作っておく」

「ラジャー」昇は入ってきたときと同じように乱暴にドアを開けて出て行った。その背中に向かって羽山は「お客様、ドアは静かに開閉願います」と呟いた。

羽山は飾ってあるパイプを取り上げ、そっと撫でた。

「マスター、そのパイプに思い出があるんですか？ いつも飾ってあるので気になってたんですけど」傍で洗い物をしていた前田が遠慮がちに聞いた。

羽山は飾ってあるパイプを取り上げ、そっと撫でた。

「ああ、昔の恋人からのプレゼントさ」

「うわあ、ロマンチックですね」

「だったらいいな、と思っただけだよ」羽山ははぐらかすように笑った。

実際は、羽山が独立するとき、それまで勤めていたバーのマダムがプレゼントしてくれたものだ。

こんな自分を可愛がってくれて、快く独立させてくれたマダムの笑顔を思い出す。まだ現役で頑張っているだろうか、そうあって欲しいと羽山は思う。

桜の花は盛りを過ぎ、川面は落ちた花びらで満開だ。水の流れに乗って花びらはゆっくりと下流へ移動していく。

羽山は流れていく花びらを、橋の上から見つめていた。ロンも傍らに座って川を眺めている。

「色々なことがあった一週間だったな、ロン」しんみりとした気分で話かけた。

「もしかすると、この前お前がクーンと鳴きながら駆け寄った影は、お前の母親だったかもしれないね」

ところがロンは花粉が鼻に入ったのだろうか、「グッシュン」とくしゃみをしたと同時に鼻をゴンと橋の手すりにぶつけた。

「お前は相変わらずドジだね。さ、ひとつ走りしよう」しんみりとした気分はどこかへ飛んでいった。リードを持ってロンと一緒に走る。早朝の遊歩道に人影はない。商店街はまだ寝静まっている。

体が汗ばんできた。息も少し切れている。

「運動不足で体がなまったらしい。腹も少し出てきたようだし、お前と毎朝走ることにするか」

羽山はロンの体を軽く叩いた。こんな穏やかな気分になれたのは何年ぶりだろう。

三十五歳で店を手放してから、羽山は過酷な労働に身を任せた。経験した仕事の数々が走馬灯のように脳裏に浮かぶ。

遊歩道に置いてあるベンチに座り、ロンに向かって話しかける。羽山の話し相手は、この三年間ロンだけだ。好感は持っているが、昇や素子には心の奥底まで明かそうとは思わない。

羽山はベンチから立ち上がると両手を頭上で組み、体を左右に曲げ、次に膝を二、三回屈伸させた。ロンも背中を反らせ、先に前足を、次に後ろ足を思いっきり伸ばした。

「ロン、帰るぞ」

遊歩道に面した店ではシャッターを半分開け、桜祭りの後始末を始めている。
今年の桜の季節は終わった。桜川周辺もやっと落ち着きを取り戻したようだった。



-fin-